

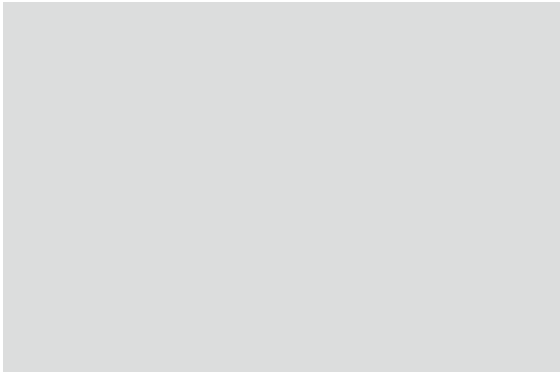
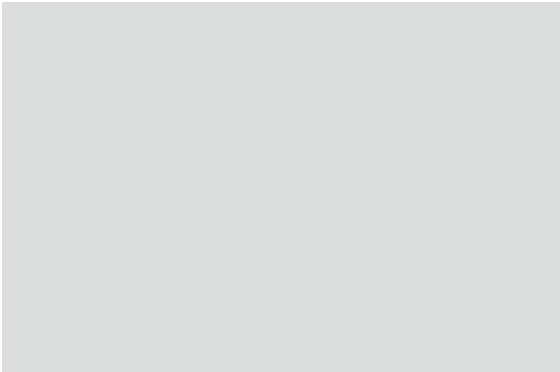
終える命、

つなぐいのち

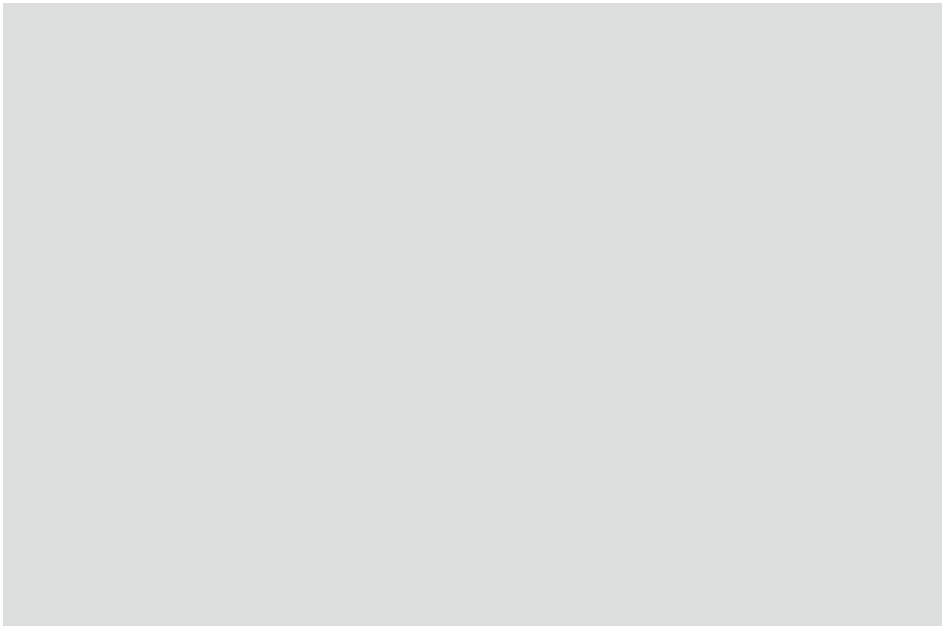
國森
康弘

第18回 さいごまで、住み慣れた場所で……

※本連載は、本文のみ無料でお読みいただけます。
写真は、冊子版でのみご覧いただけます。



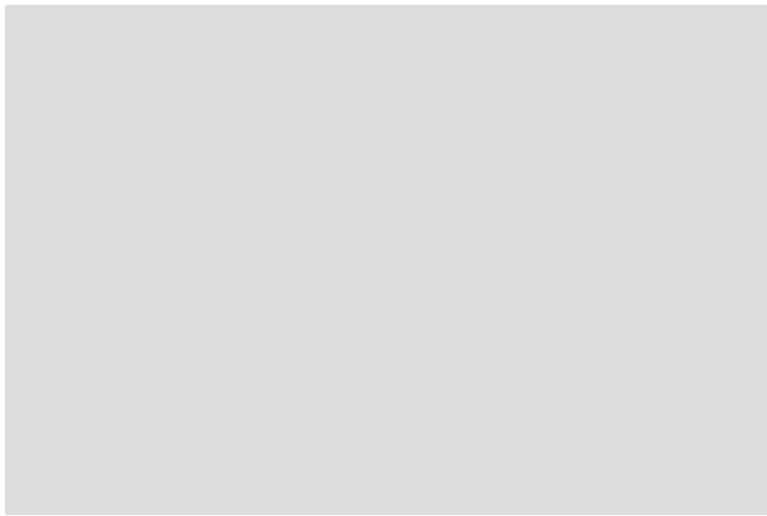
幾重もの、
人のつながりの
「分厚さ」



ありがとう。

もう……

ゆつくり眠つていいよ。



いのちのバトンを、
受け取った。

滋

賀県東近江市でいちばんの山奥、三重県との県境に近い「君ヶ畑」という集落。ここで生まれ育って、結婚し、育児、家事、畑仕事に奔走した。やがて子を巣立たせ、夫を介護し看取った。ナミばあちゃんの人生は「君ヶ畑」に、詰まっていた。

火を消し忘れ、ガスコンロから電気コンロに。認知症は徐々に深まっていく。でもナミばあちゃんはニコニコ、1人暮らしを続けていた。

医師や看護師が訪問し、ヘルパーも手伝ってくれる。薬局さんは、薬を家に届けてくれた。週末には娘や息子が食べ物を手し、孫やひ孫を連れて来るし、ご近所さんは毎日家にあがって、何時間も話し相手になってくれた。幾重もの、人のつながりの「分厚さ」が、1人暮らしを支えていた。

老衰が深まり旅立ちが近づいたころ、寝たきりになつていく母の身を案じた娘の悦子さんが「私の家に来て」と、お願いした。車で1時間あまりの距離の町中の悦子さん宅に、一時身を寄せる。夜中、1人でトイレに立って転倒。孫やひ孫が見舞いに来ても、目も開けず、返事しない。でも「君ヶ畑」という名前が家族の会話に出てくると、何か言おうと反応した。「君ヶ

畑に帰りたい……」。

それを聞いて、悦子さんはもう一度母を「君ヶ畑」の自宅に、帰した。ご近所さんは「おかえり、待ってたよー」と出迎える。家族や親戚、友人……、大切な人に寄り添われながら、息を引き取るまで5日間、住み慣れた自宅で過ごした。

ナミばあちゃんの息が止まる。家の裏手から駆けつけた悦子さんが母の手を握って、呼び掛けた。「おばあちゃん!」。すでに何十秒も経っていたが、娘に返事をするかのように、もう一度呼吸し始めた。悦子さんは今度は両手で母の手を握り直して、言った。「おばあちゃん、ありがとう。……もう……ええよ」。

悦子さんの言葉に安心したかのように、完全に息を止めた。そして、ナミばあちゃんの目からは、涙がこぼれた。

医療従事者には珍しいことではないかもしれないが、息の吹き返しと死後の涙は、家族にとっては一生胸に残る、おばあちゃんからの大切な贈り物になった。

後日、悦子さんは「看取るのはもちろん悲しかったけど、満足感というか、あつたかいものをいただいた」と振り返る。生き抜いた生命力、充足感、命のエネルギ―の、あたたかさ――。

〈2010～11年撮影〉

くにもりやすひろ●写真家。イラク戦争を機に新聞社から独立し、紛争地や貧困地域などの現実を伝えてきた。2008年から日本の「在宅看取り」の現場を撮り始める。写真絵本『いのちつぐ「みとりびと」』シリーズ（農文協）ほか。